『春』を送り、『夏』を呼ぶ。

今度の定期は 6 月 7 日(金)、京都コンサートホールです。

第 109 回定期演奏会に向けて。

2013 年春の定期は、シューマンとメンデルスゾーンです。客演指揮はおなじみの大河内雅彦氏、学生指揮は藤本直也です。週末の金曜日です。立響ファンの皆さま、そしてご家族、どうぞお誘い合わせの上、京都コンサートホールへお出ましください。団員一同、心よりお待ち申しあげております。

立命館大学交響楽団第 109 回定期演奏会

日時：2013 年 6 月 7 日（金）18 時開場　19 時開演
会場：京都コンサートホール大ホール
指揮：大河内　雅彦(客演)　　藤本　直也（学生）
曲目：シューマン　交響曲第 1 番変ロ長調『春』　メンデルスゾーン　『真夏の夜の夢』より抜粋　「序曲」「夜想曲」「結婚行進曲」　序曲『フィンガルの洞窟』

■演奏曲誌上プレビュー

北西ヨーロッパに位置する、スコットランド。イギリスを構成する 4 つの国のうちの 1 つであるこの国は、かの有名なハリー・ポッターシリーズの作者である J.K. ローリング女史が作品を執筆した土地として有名なエディンバラを首都とする、非常に景観の美しい北欧国家である。そのスコットランドの西部に広がるヘブリディーズ諸島の無人島スタファに、フィンガルの洞窟は実在する。海蝕洞に分類されるこの洞窟は、文字通り波浪による浸食で形成された、玄武岩のまるで人工物であるような六角形の突起帯が美しく、神秘を感じさせる、観光名所でもある。1772 年に自然主義者ジョゼフ・バンクスによって発見されて以来、その非凡な景観から何かを得ようと、多くの詩人、小説家、音楽家が訪れた。ドイツロマン派の作曲家・指揮者であるフェリックス・メンデルスゾーンもそのうちの 1 人である。

メンデルスゾーンが初めてスコットランドを訪れたのは 20 歳の誕生日を祝ってドイツ人貴族の招待にあずかった時だった。イングランド旅行に続いて、メンデルスゾーンはスコットランドに進み、その地で交響曲『スコットランド』を着想する。その旅行中に、嵐の夜のヘブリディーズ諸島を訪ねてスタファ島に辿り着き、観光客に人気のフィンガルの洞窟で霊感を受けた。その後すぐに彼は宿で序曲の開始主題を書き下ろし、仲の良かった姉に「僕がヘブリディーズ諸島にどんなにひどく感銘を受けたか分かってもらえるように、頭に思い浮かんだものを姉さんに届けようと思います」と手紙を添え送った。彼の死後、痛烈に彼を批判したドイツオペラの巨匠であるリヒャルト・ワーグナーさえもこの作品を「一流の風景画のような作品」として絶賛した。初演は 1832 年、彼が若干 23 歳の時ロンドンで行われ、演奏会用序曲『夏の夜の夢』も併せて上演された

銀行家の息子として生まれた彼は非常に裕福な家庭環境のもと、その天才的な音楽才能を早いうちから開花させ、「第 2 のモーツァルト」として支持された。彼はバッハの音楽の復興、ライプツィヒ音楽院の設立など、19 世紀の音楽界に極めて大きな影響を与えた。ただ、ユダヤ人の家系であったメンデルスゾーン家はいわれなき迫害を受けることが多く、それは両親の意を決したキリスト教への改宗も空しく、ほとんど変わらなかった。しかし、そのような状況にも関わらずフェリックスの業績・影響

立響楽信 36

2013. 5

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学交響楽団　ruso_info@yahoo. co. jp

力は極めて強く、終生ドイツ音楽界の重鎮として君臨し続けた。Animato 前のクラリネットのソロで、この曲に於けるフィンガルの洞窟の神秘的な部分が大成される。その後の飲み込まれるような盛り上がりの後、あっという間に終わってしまう。どこか儚ささえ感じさせるメンデルスゾーンの真骨頂、ぜひ堪能していただきたい。（文責：学生指揮者　藤本　直也）

♯

真夏の夜の夢はドイツのフェリックス・メンデルスゾーンによって二回にわたり作曲された曲であり、喜劇作家シェイクスピアの同名の物語を、音楽によって幻想的に表現しようとしたものである。さて、二回にわたり作曲されたと書いたが、一度目はメンデルスゾーンが 17 歳の時に姉のファニーと楽しむためにピアノの連弾曲として作曲されたといわれている。これをオーケストラアレンジしたのが、今回演奏する『真夏の夜の夢』の序曲にあたる。

この序曲に感銘を受けたプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム 4 世の勅命により、メンデルスゾーンは 1843 年に序曲の主題も再利用して『夏の夜の夢』上演のための付随音楽作品 61 を作曲することとなった。これが『真夏の夜の夢』のその他の曲にあたる。

さて、この曲をしっかりと聞くためには情景描写が不可欠であるため、簡単に話の流れを書き記しておくことにする。とある街の人間たちが森へ集まることになるところから物語は始まる。ある人は父親に理解されない故に駆け落ちを企画して、またある人は駆け落ちする人を追いかけるため、公爵の結婚式での余興練習のため、それぞれが同じ森へ向かう。だがその森では妖精たちが暮らしており、その妖精たちの王と女王は喧嘩の真っ最中であった。なんとかしようと画策した王様が、目を覚ました時初めて見たものを好きになるという魔法の薬を用いて事態を解決しようと企む。その際にいたずら妖精パックが森に来ていた人々にもその薬を使用してしまい、駆け落ちに来たはずの二人は不仲になり、妖精の女王は、いたずら妖精によって頭がロバへと変化した、余興練習にきていた者に恋をする。まるで夢を見ているような状況に誰しもが悪い夢なら覚めてくれと懇願する。そして女王が可哀そうになった妖精の王が魔法を解いていき、次の日の朝にはすべてが幸せな方向へ解決しているのだった。という内容である。具体的に知りたい方は書籍の方を参照していただきたい。今回演奏する『序曲』は、妖精の森で妖精が飛び交い、ロバが鳴き、いかにも冒頭を感じさせる部分である。『夜想曲』は森に来た人間たちをいたずら妖精が眠らせるシーン。『結婚行進曲』は魔法が解けたあと、全員が幸せな状態で人間の公爵の結婚式に参列してお祝いしているシーンである。有名な曲なのでご存知の方も多いであろう。長々と説明してきたが以上が真夏の夜の夢の全貌である。メンデルスゾーンが描く幻想的な世界にどうぞ夢を馳せてみて頂きたい。
（文責：副学生指揮者　竹下　裕也）

♭

ロベルト・アレクサンダー・シューマンは、1810 年に今現在のドイツであるザクセン王国はツヴィッカウに生まれた。彼は早くから音楽や文学に親しみ、作曲や詩作を試み、豊かな才能を示した。そんな息子の音楽の才能を認めていた父は 1826 年に亡くなり、安定した生活を願う母の希望で法学を学ぶことになり、1828 年に、日本でいう中高一貫校ギムナジウムを卒業し、ライプツィヒ大学法学部に入学した。1829 年ルプレヒト・カール大学ハイデルベルク法学部に転学、このまま法学者として一生を終えるかに思えた。しかし、シューマンは音楽家への夢を捨てることができず、1830 年に高名なピアノ教師、フリードリヒ・ヴィークのもとに弟子入りし、ピアノの練習に励んだ。同年、シューマンの作品「アベッグ変奏曲」作品 1 が初めて出版される。その後、過度のピアノの練習により手を痛めたため、ピアノの演奏を諦めなくてはならなくなり、音楽評論家、作曲家として生計を立てる決意をする。24 歳の時のことである。

彼は才能をここからさらに発揮する。「謝肉祭」、「幻想小曲集」、「子供の情景（第 7 曲「トロイメライ」が有名である）」など珠玉のピアノ作品を発表していく傍ら、評論家としては 1834 年音楽雑誌「新音楽時報」を創刊した。この雑誌は現在でも続く歴史の長いものとなり、かのブラームスやショパンが広く世に認知されるきっかけを作ったのもこの雑誌のシューマンによる評論からである。また、1840 年は「歌の

年」と呼ばれ、歌曲の制作に熱中する。「詩人の恋」、「女の愛と生涯」、「リーダークライス」などを次々発表し、人気を博した。順風満帆の音楽家人生を歩んでいるかに見えたが、結婚を機に彼の人生はまた一転する。彼が妻に迎えたのは、当時有名なピアニストとして名を馳せていたクララ・ヴィークであった。先述したシューマンの師であるフリードリヒの娘でもある。フリードリヒは結婚に激しく反対し、シューマンは訴訟を起こしてまでクララとの愛を貫いた。2人は8人の子供に恵まれ、結婚後は交響曲の制作に力を注ぎ、4つの交響曲を世に送り出した。1854年、本人も自覚していた元々の躁鬱、音楽監督時の精神的疲労に加え、青年期に娼婦より罹患した梅毒に起因するとされる精神障害が著しく悪化し、2月27日にデュッセルドルフのライン川に投身自殺を図る。間もなく助けられ、その後はボン近郊の精神病院に収容されることになるのだが、そのまま46歳という若さで、シューマンはこの世を去ってしまう。

交響曲第1番『春』は、1841年3月に初演されたが、その時の指揮者は彼の大親友でもあったメンデルスゾーンが務めている。変ロ長調で始まるこの交響曲からは、春の喜びや雄大さが伝わってくる。

第1楽章　序奏を伴うソナタである。トランペットとホルンによるファンファーレから始まり、ゆったりとした旋律から徐々にテンポがあがり、春の気分の高揚を感じさせるような第1主題に突入する。終盤のフルートソロからの楽章の終わりにかけては、かけて抜けていくような旋律を味わえる。

第2楽章　ラルゲット、変ホ長調、8分の3拍子の抒情的な楽章である。春における、卒業・別れなど悲しみの部分を表しているのではないかと思われる、冒頭からのバイオリンによる主題にご注目。トロンボーンのコラールで静かに終わりを迎え、間髪入れずに第3楽章へ移る。

第3楽章　第2楽章とは打って変わった、二つの中間部をもつスケルツォである。自然界の野性味溢れる主題はニ短調、この主題は計3回登場する。二つ目の中間部で変ロ長調に転調し、すぐコーダに移り、曲はまるで急いで逃げ去るかのように締めくくられる。

第4楽章　ソナタ形式。勢いよく駆け上る短い序奏の後、1st バイオリンによる細やかな動きから始まる主題は交響曲の最後にふさわしい軽やかで春の爽やかさ漂う旋律である。ホルンソロ、フルートソロ、フルート・ファゴットによるソリの流れからの再現部、段々と早くなっていく中でのトロンボーンの快活な動きを経て、フィナーレを迎える。

春が終わり梅雨の時期に入ろうとしている今、桜舞い散る季節をもう一度思い出し、シューマンの世界を満喫してみてほしい。（文責：学資指揮者　藤本　直也）

大分公演、成功しました。

去る2月27日、立響は大分市・iichiko総合文化センターグランシアタにて大分特別公演を開催しました。皆様のお力添えにより、今回の演奏会を無事に成功させることができました。心より感謝申し上げます。今回の経験やご縁を大切に、団員一同、より一層精進していきたいと思います。今後の立響の発展にご期待ください。

立響と関連団体のこれからの演奏会です。新キャンパスの準備が進む茨木市での立響公演もあります。

立響・学内演奏会

日時：2013年7月5日（土）　開演時刻未定
会場：衣笠キャンパス以学館ホール
曲目：モーツァルト　ピアノ協奏曲第10番ほか

衣笠交響楽団定期演奏会 -第21回京都公演-

日時：7月6日（土）　18時開演
会場：京都コンサートホール大ホール
指揮：伊藤和夫ほか
曲目：ベートーヴェン　歌劇『フィデリオ』序曲　交響曲第8番　ボロディン　交響曲第2番　ほか

立響・サマーコンサート

日時：8月8(木)　開演時間未定
会場：長岡京記念文化会館
曲目：プロコフィエフ　『ピーターと狼』『ロメオとジュリエット』より抜粋　　となりのトトロ組曲　ほか

本年度のサマーコンサートは、ファミリー向けのコンサートを開催する予定です。幅広い客層に楽しんでいただけるよう、プログラムや演出も工夫しております。

立響・特別演奏会 茨木公演

日時：9月29日（日）15時開演　会場：茨木市民会館

立響 60 周年記念事業の概要とお願いです。

既報の通り、立響は平成 27(2015)年に創立 60 周年を迎えます。OB 会では立響および OB 会活動の一層の発展を願い、立響創立 60 周年記念事業を計画しています。

立響創立 60 周年事業概要

- 「立響 60 周年誌」の編集～刊行
- 平成 27 年(2015 年)の現役 60 周年活動支援
  …記念演奏会(検討中)などへの支援
- 「立響 60 周年記念レセプション」の開催
  …秋定期の終演後開催予定

各事業につきましては、現役団員諸君や当会若手役員を中心に検討を重ねています。より具体的な内容につきましては、順次ホームページや『立響楽信』に掲載してまいります。ご期待ください。

OB・OG の皆さまにおかれましては、何卒、趣旨にご理解いただき、創立 60 周年特別賛助金（一口 10,000 円）へのご協力、そして各事業へのご参加をよろしくお願いいたします。

年会費は 5,000 円です。

OB 会年会費は 5,000 円です。会員各位におかれましては、何卒ご理解とご協力をお願いいたします。また、年会費納入時のお手間を省くため「郵便自動払込」を進めています。他の金融機関支店・ATM(コンビニ等を含む)からの振り込みも可能です。振り込みの際には、卒業年度を確実に記載してください。

→ ゆうちょ銀行店番 448 普通預金 9306461 立命館大学交響楽団 OB 会

好・評・連・載

吉田興三郎のレコード棚

シューマン　交響曲第 1 番変ロ長調『春』

この曲はディスクが 6 種類しかなく、しかもフルトヴェングラー指揮のウィーンフィル(1951 年ライブ)しか聴いておらず、今回改めて他の演奏を聴いた次第です。フルトヴェングラーの演奏はベートーベンの初期作品を聴いているようで、シューマン作というより前者二人の合作作品を聴かされている感じです…。それぞれ立派な演奏ですが、、インテンポなために少し怠い感じがします。チェルビダッケの演奏で感動しない場合は、それは曲が良くないと言われますが。

一番良かったのはポール・パレー指揮デトロイト交響楽団。冒頭の金管にまずハッとさせられ、続くアレグロの鮮烈な響きには大変感動させられました。全体に切れ味抜群、テンポは速めだが味わいは濃厚で、トスカニーニとフルトヴェングラーを足して 2 で割ったような演奏です。ポール・パレーは 1886 年生まれのフランスの指揮者ですが、ミュンシュやクリュイタンスと同じく、フランス物を中心にドイツ音楽も大変得意にしており、モーツアルトの 41 番『ジュピター』は僕の 38 ディスク中のナンバーワン!(1960 年ライブ　デトロイト交響楽団)

このコンビは他のいわゆる 5 大オーケストラ…1960 年頃のステレオ初期時代の、ミュンシュ／ボストン交響楽団、バーンスタイン／ニューヨークフィル、オーマンディ／フィラデルフィア管弦楽団、ライナー／シカゴ交響楽団、セル／クリーブランド管弦楽団のどれよりも良い演奏をしています。俗に下手なオーケストラは存在しなく、存在するのは上手い指揮者か下手な指揮者かと。まさしくその通りだと思います。皆様、パレー／デトロイト交響楽団を一度聴いてみてください。特にお薦めはサン＝サーンスの第 3 番やフランス物管弦楽曲です。

関係ありませんが、以前に宇野功芳氏があまりに褒めるので、ミュンシュ指揮のパリ管弦楽団の 1967 年ライブ『幻想交響曲』を聴きましたが、これがハチャメチャ、感情剥き出し、理性ゼロのおバカ演奏。宇野さん、金返せ!もう騙されないぞ。この 4 月に同じ曲をクレンペラー／ニュー・フィルハーモニア(1966 年ライブ)をイギリスのテスタメントレーベルで聴きましたが、ここ 2、3 年で一番の久方ぶりの大感動できました。

これは予想通り。クレンペラーさん、有難うございました。　　吉田興三郎 (S46 Tb.　箏演奏家)

謹んでお悔やみ申し上げます

宮野　聖孝　様　昭和 52 年　経営　cl.

平成 24 年 11 月 7 日ご逝去

ご活用ください。

OB 会ホームページ→　http://rusoob.web.fc2.com/

OB 総務のアドレス→　obsoumu.ruso@gmail.com

OB 会メーリングリスト→　sibelius.nr.5@gmail.com